ようこそ！夢の本棚へ

発行所：松居直コレクションプロジェクト
代　表：金戸 美紀子
事務局：石川県小松市
小馬出町10-3
空とこども絵本館
☎ 0761-23-0033
bookrin@city.komatsu.lg.jp

【活動方針】①絵本の楽しさを伝える〈親子読書の奨励〉②絵本の歴史を学び、進むべき方向を考える〈絵本文化の研究〉③市が所有する知的財産として、次世代に正しく伝える〈絵本文化の継承〉

声の文化と絵本③
～言葉の体験が自分の心を育てる～

2、3、4歳の体験

◆私は、2歳、3歳、4歳の時から、母が毎晩、絵本を読んでくれました。寝かせるために。たいがい寝るのは、母親の方ですよ。昼間忙しい人ですからね。商家の女将さんですから。私の顔なんか見たりすりすりことは、ほとんどなかったですけど、夜は布団の中でちゃんと添い寝をしながら、絵本を読んでくれました◆『コドモノクニ』という大正の終わりから昭和の初期にかけての日本の最高の雑誌ですけど、今はほとんど見ることはないでしょうか。日本の童謡の黄金時代です。北原白秋、西条八十、野口雨情。そういった人の新作の童謡ってのは『赤い鳥』か『コドモノクニ』に出てたんです◆そして、それに見事な挿絵がついていた。日本の童画というものの出発点は『コドモノクニ』ですから、武井武雄、清水良雄、本田庄太郎、初山滋。私は、その頃の絵描きさんの名前は、今でも覚えています。絵を見ただけで、パッと絵描きさんの名前を言えますよ。教えてもらったんじゃありません◆それは、2歳、3歳、4歳の時の私の体験。子どもってのは、ものすごい感覚を持ってるんです。耳で聞いたり、目で見たりする。絵は全部、言葉なんです。

2つの言葉の世界

◆ですから、絵本の中には、文字になってしまっているあの「言葉の世界」と、「絵の言葉の世界」と2つの言葉の世界がある。それをしっかりと受け止めていかないと、子どもの中に〝絵本体験〟ってのはできないんです◆耳から入ってくる言葉と、目で見る言葉とが重なってる。全く一致してる部分もありますけど、言葉で書いてないことが、絵になっていっぱい描かれていますよね◆絵描きさんてのは、自分の言いたいことも描いてますから「どうしてこんな所にねずみがいるの」なんてこともあるんですよ。童謡と全く関係ないようなねずみが、ちょこっといる、そういうのが面白いんですよね。子どもってのは、好奇心の塊ですから◆そして、耳からの言葉と目から入ってくる言葉ってのは、子どもの中で一つに溶け合ったところに絵本ができる。それが、絵本体験。それは絵本という絵の世界よりも、もっともっと微妙なニュアンスがある面白い、生き生きしたものなんですね。

ものには言葉がある

◆まず、お父さんとお母さんが、日常生活でどういう会話をしていらっしゃるか。あるいは、家では、どういうことで日本語を使ってらっしゃるかですね。たとえば親父が「コップ、持って来い」と言うとコップが出てくるんですが、「これがコップか」と思いますよ。コップなんか、子どもが教えられたことはありません。ご飯もそうです。教えられてないけども、生活してると「ものには言葉がある」ということを意識します◆ですから、家の中でご飯を一緒に食べるなんて、とっても子どもにとって言葉の良い体験なんですね。私は、父親と母親がご飯を作りながら会話してるのを耳をそばだてて聞いていました。「何言ってんだろう」と。そうすると「こういう言い方があんのか」「ああ言うんだな」と、子どもが耳から聞いてる言葉の一つ一つに、自分の中でいろいろ感じたり、考えたり、思ったりしている。そして、「自分の心」っていうものを育てているんですね。そういうことを今の家庭生活でどれくらいできているか。それが、皆さんご自身の言葉でしょう。言葉を教えるんじゃなくて体験して覚えますと、それが結局、一つは〝読書の基礎〟を作るんです。言葉に対する感覚を生き生きさせてくれるんですね。（つづく）